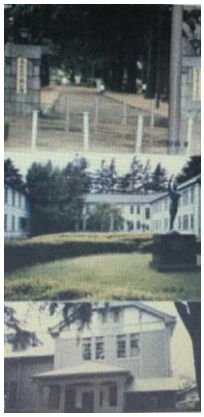
信州大学時代の「思い出」

先日、たまたま東京大学の「安田講堂」攻防の映像を視聴した。東京大学ではないが、まさに自分史として信州大学時代に思いを馳せた。



3 枚の写真はかなり前に松本「あがたの森」で撮ったものだ。当時のキャンパス中央に続くヒマラヤ杉。校庭中庭を取りかこむ教室。中庭は散策、集会の場であった。講堂横の会議室には忘れられない記憶がある。ここで大学側と団体交渉していたとき、「全共闘」系学生(中心メンバーは日本維新の会から参院議員になった猪瀬直樹)により暴力的に閉じ込められた。学生自治会の役員として交渉に参加していたので、私もその一人だった。信大「人文闘争」と呼んでいた学生運動が、この「事件」から本格化することになる。

東大全共闘らの学生が、安田講堂を中心に全学的な封鎖を続けていた。1968 年後半からは全国的に大学紛争が激しくなっていた。この年は長野県でも、大学と高校の学園紛争が吹きあれた年であった。

信大人文学部も講堂から正門へと封鎖がつづき、キャンパスで講義ができなくなった。公民館などを使い、自主ゼミなどを行った。授業料を払っているのに、なぜキャンパスに入れないのか、正規の講義を受けられないのかと、学生の間にも不満が高まっていった。そしてキャンパス「封鎖解除」に向けて、闘いのヤマ場を迎えた。写真は信濃毎日新聞『昭和の記録』によるが、級友らの姿も写っている。新聞ではけが人も出た「内ゲバ」と書かれたが、キャンパスを取り戻すため、多くの学生が参加した。自治会役員として、責任と重圧の毎日だった。

こうして学部 2 年から 3 年にかけて、自治会活動にのめり込んでいった。信州松本の地でも、時代の流れのなかで「人文闘争」が繰り広げられた。闘いが収束に近づくと、なんだか猛烈に学問への意欲が再び湧いてきた。渡辺義晴先生のご自宅で、ドイツ語で資本論を読む会に参加したことを思い起こした。渡辺先生のじつに味わい深い話に夢中になったものだ。さて、進路をどうするかで迷った。

もっと勉強したいという気持ちが高まり、大学院への進学を考えるようになる。渡辺先生やドイツ文学の中野和朗先生に相談して、悩みを聞いてもらった。中野先生にも、お世話になった。ドイツ語への興味とともに、あつく語られる先生に励まされ、大学院に進もうと心に誓った。両親は学生運動にあけくれ、就職もしないことに猛反対したが。志望する大学院として、何はともあれ大阪市立大経営学研究科をめざした。『社会資本論』の著者、宮本憲一先生のもとで研究したかったからだ。なんとか卒業して、不安を抱え大阪に旅立った。いまから 51 年前のことである。

(2022 年 9 月 22 日)